

## —《書評》—

清水稔著 山川出版社

『曾国藩——天を畏れ勤・儉・  
清を全うした官僚』

(東京学芸大学) 田中 比呂志

## はじめに

本書は曾国藩の評伝であり、山川出版社のシリーズ企画である「世界史リブレット人」を構成する一冊である。著者の清水稔氏は、近代期の湖南省研究者としても知られる。周知のとおり、曾国藩は伝統的知識人の一人である。彼はまた官僚として清朝に使えた人物の一人でもある。日本における曾国藩についての専著・専論は、孫文や梁啓超などと比較して大変少ない。また、曾国藩についてよく語られるのは太平天国討伐と、それに続く洋務運動推進の文脈においてであろう。本書においても無論、上述したいくつかの側面について述べられているが、それ以外の事についても取り上げている。では、さっそく本書の叙述に分け入ってみよう。

## 1. 本書の方法論的特色

曾国藩研究の大まかな展開は、本書8頁において簡潔にまとめられている。その評価はかつては「善悪二元論的評価」あるいは「階級闘争史・共産党史・国民党史上のイデオロギー評価」がなされ、そして「近年における中国固有の西洋化・近代化あるいは近代的国家建設あるいは中国の伝統と近代の相克という観点からの新評価」が登場した。このように著者は、従来の曾国藩評価の変遷を踏まえつつ、さらに「パーソナリティ」に着目して「人間曾国藩」に迫ろうとする。では、「パーソナリティ」とは何か。著者は「人間の個性・性格・気質素質などの総体をいう」とし、その形成には「生物学的・環境的・文化的要因がある」と説明する。より具体的には「容姿・病歴・食事・家族・一族・職業・経済状態・地理的風土・交友

関係・地域の習慣風俗などが重要な要素となる」とする。

「パーソナリティ」に着目した中国近代史研究者は、実は著者が最初ではない。著者自身が別の論稿<sup>(1)</sup>で述べているように、日本における草分けは、著者の師であった故波多野善大氏であった。その波多野氏は1976年に曾国藩の「パースナリティ（以下、パーソナリティに統一）」について検討している<sup>(2)</sup>。「パーソナリティ」という言葉を使った日本における研究としてはこれが最も早期のものであろう。しかし「パーソナリティ」という言葉を使用してはいないが、民族性、精神構造、生活様式、郷土と家世、気質と風格などに着目した曾国藩研究もある<sup>(3)</sup>。

本書の構成を大まかに紹介すると次のようになる。第一章、第二章では家世や家族に関する叙述にはじまり、「家訓」、「科举試受験」、「師弟関係」、「学問研究」と見出しは続き、曾国藩の人格形成に大きな影響を及ぼしたと思われる事柄が述べられていく。そして第五章の最後には「曾国藩の人間像」という一節が設けられていて、本書が結ばれる。なお、第三章から第五章では太平天国との戦い、洋務運動、天津教案に関する叙述がなされ、曾国藩の生き方が重ねられていく。ここでもパーソナリティ研究の成果が、各所にちりばめられているように思われる。とはいえ、この部分の記述は、19世紀後半の清朝中国に生じた諸事件の記述が中心となっていて、パーソナリティに関する記述や分析はまるで隠し味のように、叙述に膨らみを持たせているように思われる。

## 2. パーソナリティ研究の有効性と応用

パーソナリティ研究を志向するのは、「人間」への関心の強さであろう。「人間」のそのときそのときの判断や選択がいかなるものかそれが歴史を形成し動かしてきたのか、その選択をなさしめた要因一体何であるか、というような関心である。

では、パーソナリティ研究の有効性は一体那边にあるのか。第1に、ある人物がある局面において採用した行動や選択などに対して、何故そのように行動したのか、何故そう考えたのかという素朴な疑問に対する回答や示唆を与えてくれる可能性があるということだ。とりわけ歴史上の分岐点におけるある人物の行動などの分析には有用かもしれない。第2に、その人物の総合的な人間性のありかたや行動の統一的な探求には有用なのではないだろうか。人間は時として表面的には矛盾した行動を取るように見えることがある。これを単に矛盾としてしまってバッサリと切るだけではなく深まらないうちに思われる。第3に、本人をとりまく人間関係の分析にも有効性を発揮しそうだ。ある個人と、その周囲にいてその個人と何らかのつながりのある人々の分析には、一定の効果を発揮しそうである。

しかしながら、パーソナリティ研究には難しい側面もある。一つは、あまりにもこだわると、精神分析的な歴史解釈となってしまうからだ。歴史学研究の守備範囲から大きく逸脱してしまう恐れもあるということだ。それからもう一つは、史資料に関することである。歴史上の人物のパーソナリティを取り扱うだけに、史資料の存在が分析の成否を左右する。しかもその史資料で不可欠なのは、日記や書簡などのプライベートに関わるような史資料群ということになる。また、日記などが残されているとしても、問題はそこの中身である。現在、評者を含めて十人前後のグループで清末民国期に生きた郷紳である王清穆の残した日記(『農隱廬日記』、上海図書館蔵、手書きのもの)を読んでいくという研究会を行っている(2006年3月以来、16年ほどとなる)<sup>(4)</sup>。まだ全部読了してはいないが、記載されている内容の大半は何時どこで誰と会ったか、どこに出かけたか、そして水利関係の記載(水害防止)、地域の治安維持、などの記載が主たるものとなっていて、この日記で

パーソナリティ分析を試してみたいという魅力に誘われるのだが、一方でなかなか難しいようにも思われる。日記にかなり多くの人物名が登場するが、それらの人々が私的な面で、王清穆とどのような関係なのか、なかなかわからないからである。やはり、日記の「質」が研究の成否を左右しそうである。

以上、本書を読んで感じたことを縷々述べさせていただいた。本書読了後に評者自身も簡単ではないが試みにいくつかの日記を素材にして、パーソナリティ研究に挑戦してみようかと考えるようになった。このような心肝は本書によって生じたものである。本書に感謝の念をいだきつつ、搁筆することにしたい。

(2021年3月、128ページ、本体800円+税)

#### [注]

- (1)清水稔「パーソナリティ研究序説——曾國藩の事例を通して」『文学部論集(佛教大学)』87号、2003年。
- (2)波多野善大「曾國藩のパーソナリティーについて」『愛知学院大学文学部紀要』6号、1976年(のち波多野善大『近代中国の人物群像』汲古書院、1999年に再録)。
- (3)大谷孝太郎『儒將曾國藩』東京布井出版、1977年。
- (4)研究会で検討し註釈を付したものについては、『近代中国研究彙報』(34号～)を参照のこと。